

人格磨き審査臨む

イメージ広げて創作を

埼玉文学賞を語る

〈下〉

詩部門審査員 北畠 光男さん

2013年から「彩の国 埼玉りそな銀行 第53回埼玉文学賞」詩部門の審査員を務めている詩人の北畠光男さん(75)は、上里町在住。30歳で同賞準賞を受賞している。応募者と審査員の両方の立場での経験を踏まえ、「詩を愛する人の大きな励みになる賞。だからこそ常に自分を磨き、審査に臨んでいる」と語る。(小出菜津子)

岩手県石巻町出身。酪農学の時、本庄市の県立児玉農工高等学校(現・児玉白楊高校)に学同好会で詩に出会う。26歳教員採用され、埼玉に転居し

た。寄居町風布地区で、北国にはない、鈴なりみかんの情景を見て詩につづり、1976年に埼玉文学賞の準賞に輝いた。「埼玉の頂上のような賞で、憧れだった。だから準賞をいたいた時はうれしかったし、『これでいいんだ』と大きな自信になった」と振り返る。

その後も高校で教鞭をとる傍らで詩作に励み、優れた詩集に贈られる富田碎花賞、丸山薫賞などを受賞。2017年21年、埼玉詩人会会長を務めた。著作は10冊以上。「動物哀歌」で知られる岩手県出身

身の詩人・村上昭夫(1968年に41歳で死去)研究の第一人者でもある。「暗中模索しながら自分で自分を見つけていくのが詩。ずっと生命の姿みたいなものを追いかけてきた」と語る。

1969年に創設された埼

玉文学賞。県内在住者であ

れば題材は自由であるため、震

災や新型コロナといった時代

を映したものから、家族、恋

愛、風土、歴史までバラエテ

ィに富んだ作品が集まるのが

特徴だ。詩部門では、202

1年は前年より56点増の33

1点が寄せられた。「入賞者

は女性が増えてきたように思

う」という。

審査では、200~300

ある応募作を全て3回以上熟

読するという北畠さん。「物事

を観察するのは大事。でもそ

こで終わっている人が多い。

文化ワイヤード

色川大吉さん 追悼の文集

「民衆史の狼火」刊行

時代を動かす市井の人々に伴走した歴史家色川大吉さんが死去した昨秋以降、新聞や雑誌に掲載された多種多様な追悼文を集めた「民衆史の狼火(のろし)」を(不)出版が刊行された。編者のジャーナリスト三木健さんは「生涯

きたばたけ・みつお 1946年、岩手県生まれ。「歴程」「撃竹」同人、村上昭夫研究「雁の声」主宰。日本現代詩人会理事、日本現代詩歌文学館理事・評議員。主

な詩集に「救済まで」(第3回富田碎花賞)、「文明のど」(第35回埼玉文芸賞)、「北の蜻蛉」(第19回丸山薫賞)、「死はふりつもるか」(第13回埼玉詩人賞)

17音の架け橋

「A.I.研究

程

現代詩人会理事、日本現代詩歌文学館理事・評議員。主

な詩集に「救済まで」(第3回富田碎花賞)、「文明のど」(第35回埼玉文芸賞)、「北の蜻蛉」(第19回丸山薫賞)、「死はふりつもるか」(第13回埼玉詩人賞)

